ひるなかの北極星

札幌市医師会
コロンビア内科
小谷（おだに）　晃司（こうじ）

令和４年８月６日、今年も広島で平和記念式典が開催された。それに先立つ同月４日、ロシアの駐日大使が広島を訪問して慰霊碑に献花、集まったメディアを利用して存分に自説を主張して帰っていったらしい。広島市はウクライナ侵攻を理由に式典にロシアを招待していなかったそうだ。どっちもどっちだなと思った。ツールとしての特性上、政治利用から完全に免れることも難しいのだろうが、追悼行事に追悼以外の意味や目的を持たない人たちの気持ちを逆なでするのはよくない。

広島平和記念資料館にはキツめの思い出がある。現在のクリニックの開院直前、開業したらまとまった休みは取れないだろうと考えて、一ヵ月程、車で旅に出た。中学校に上がったばかりの長女はどうしても学校を休みたくないというので妻とお留守番、ユネスコ世界遺産の見学が目的だと担任の先生に言い訳をして、当時小学５年生だった次女と二人、予算と時間の都合で立ち寄れなかった沖縄を除く全国46都道府県を巡った道中、広島で「事件」は起こった。フィクションだと思われるのが癪なので明記しておくと平成21年秋のことである。

次女と二人で資料館の展示室にいると、後方から修学旅行と思しきセーラー服集団がやってきた。日頃おちゃらけキャラで通る次女ですら、ここではそれはご法度だと本能的に察する空気の中、ほかの入場者と一緒に静かに展示に見入っていると、その修学旅行生のうちの数人が大声で「グロっ！　よくこんなの見れるね！　信じられない！」とわめきながらパンフレットで自分の顔を覆い、列を抜いて足早に通り過ぎていった。一瞬、魂が飛び立ちそうになった。周囲の大人も同様であったと思う。ソトヅラが良いというか誤解されがちだが、実は私は我ながら短気で、それをよ～く知る次女が、そのときもその子たちに私が何か言うんじゃないかと不安と期待の入り混じった目を向けてきた。私は何も言わなかった。その子たちは正直だと思ったからだ。高校生にしてこの場でそれが言えちゃう幼稚さは致命的かもしれないが、そんなものは知らないおじさんに叱られたところで治らない。ここは今後の「成長」にのみ期待する局面なのであろうと、いつになく大人の心でスルーしようとした次の瞬間、後ろから追いついてきた同じ学校の子が私の横で、これまた大きな声でこう言った。「うげ～、ゲロ吐きそ～！」おいおい、さっきのやつらがマイノリティじゃなくて、君たちは基本がそれなのか。「どんな学校やねん」思わずガンを飛ばした私はそこで目を疑った。セーラー服の襟の意匠に見覚えがあったのだ。いや、落ち着け。決してセーラー服マニアではない私だ。セーラー服なんてこれまでに忘年会の余興で２回しか着たことがない。他校の空似ってこともあるかもしれないではないか。大体、はるばる広島まで来て、札幌の女子高と一緒になっちゃう確率ってどんだけなのよ、などと必死に打ち消そうとする私に無慈悲な追い打ちがかかる。展示室から外に出る通路で来館記念のスタンプを持ち上げてガナるセーラー服。「キープしてるから早く～！」、そこへ仲間が追いついて「どこに押す？」「パンフの裏でいいしょや」。いやん、おじさん知ってるわ、その言語。そして極め付きは停まってるバスに書かれた学校名・・・ビンゴ（泣）。嗚呼、人生であれほど札幌を恥ずかしいと思ったことがあっただろうか。いいや、ない。断じて、ない。

あれから13年、時の経つのは早いもので皆さんもアラサーのお年頃だと思われますが、その後いかが成長なされましたでしょうか。それとも、あのまま大きくなって今ごろ人の親とか？　後者が恐ろしすぎて封印していた忌まわしい記憶。